

あを

3

2013



新宿三丁目

生とは、少数者から多数者への、知れるもの持
てるものから、知らず持たざるものへの、贈物
である。

アメデオ・モディリアニ

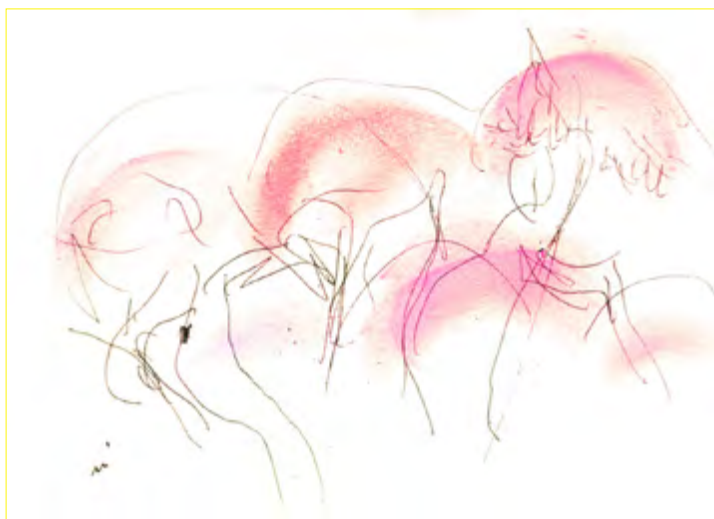


Modigliani
モディリアニ
婦人像

ファブリ世界名画集
平凡社版より

あを

三 月



花の雨

佐藤喜孝

花の雨油塗れの油差

風に散り雨にちりつつ絲ざくら

クレソンの白和といふ春の雨

櫻鯛晝をもすこし暗うして

花ふぶき石より出づる菩薩さま

石佛の裾におよびぬ春の草

春雨は黄色の薔薇には降らぬ

前号より

小学校の高学年の時、そこから坂を上って五六分の所へ引越した。それから以後バリアが張られたやうに全く近寄ることをしなかった。遠い所であるかのやうだ。自分の事ながら全く不可解なことである。バリアといへば「下町」もその一つであった。東京の下町は巴里やロンドンと同じくらい行き難い遠い所になってゐた。初めて行った時はドキドキそはそはしてしまつた。さう私の出来たての句集を台東区下谷の『暖流』のお世話になつた先輩に届けた時である。

「ふるさととは」と尋ねられたらきつとあの川添いの通りと答へるかもしれない。室生犀星ではないが「ふるさととは遠きにありて思ふもの」といふことが。遠きは距離のみのことではなう。

新 年 須賀敏子

ぼんやりの平和あはあは去年今年

初声を聞き分けてゐる相思鳥

淑気満つ弓道場の夜さりかな

子ら帰る折紙の鶴福笑ひ

福詣麻布は坂と大使館

初旅や妻籠しんしん暮れてゆく

誘はれて銭湯へ行く女正月



川

竹内弘子

感情の芦つのぐめる最上川

冬銀河ちひさくちひさくちひさくなれ

雪片の降り込みざまに川流る

恋の猫川原に下りて水をのむ

河川敷浸しはじめし春の水

川沿ひにぜんまい採りのテント張る

つまさきに川藻つめたき春のゆめ



大寒 田中藤穂

大寒の桜の枝の光りをり

餌台へ真赤な林檎雪が降る

冬の坂家康遺訓思ひつつ

メタセコイア針の葉降らす冬の沼

綿虫やなかりしごとくありしこと

寒暁の紫雲指しつつ発たせけり

大寒やこころの箍を締めなほす

春を待つ

ラジオが今日から大寒だという。十四日に降った雪が道路には殆どなくなつたが、庭にはたつぷり残つていて朝雨戸を開けると寒気が肌を刺すようだ。こんな時雀や鴨たちはどこでどうして過すのかしら。

でも隣の桜の枝々は朝日を受けて嬉しそつに輝いている。十二月の頃から思うと心なしか枝は瑞々しく、木の中ではもう花を咲かせる支度がか着々と進んでいるらしい。

生協へ行ったら節分の豆を積んで売っている。節分がすんだら次はお白酒や 雛あられが並ぶことでしょう。この文があをに載る頃には、お隣の桜の芽もすつかり膨らんで、春ももう目の前に来ていることでしょう。

初 曆 長崎桂子

参道に反省多し年惜しむ

波押へ勾玉池の鴨の聲

數へ日の僅かな青菜伊勢平野

遠出して半日小春なりにけり

初曆傘寿迎へる感慨に

初氷足下の朝静かなり

春近し日差に土の割れ目かな

一月八日は久し振りに自転車に乗った。足が少しよたよたしている。年末から年始にかけての厳しい寒さは、体に響いて体調を崩してしまったので何事も抄らなくて随分と気が滅入る日もあった。

九日に地区のお達者クラブの初会合があつて、二・三人の方が欠席していた。その方にお電話をしたら、もう一ヶ月以上になるのに咳がまだあり、つい寝ていることが多いと。

半日でも暖かな時があり、一時でも早く全快して欲しいと唯願つて居ります。



早崎泰江

大寒や散歩の小犬厚き服

温々と朝の目覚めに雪けはひ

寒風や空の青さに救ひあり

羽子の音遠き日のことなつかしむ

恙無く日々過ぎゆけり雑煮餅

臘梅のほのかにかをり友見舞ふ

涙して別れて献花かすみ草

お正月、千葉に住む孫娘がリュック姿で羽子板を持ってやってきた。

羽子板と云っても羽子板市に見られるような立派な物ではない。素朴な板切れに近いものである。彼女の家の近所に古くからある駄菓子屋兼玩具屋のような店で買ったらしい。

早速合流した従妹と羽子つきを始めた。意外と羽子板が響いて良い音を立て羽子が宙に舞った。

お正月の深閑とした空気を破る少女達の屈託のないさざめきも、心地よく感じられた。願わくばこの平穩が出来るだけ長く続きますようにと祈る気持でありました。

初 旅 森 理 和

初旅は兄の見舞へ単線路

鉄塔へ目指す一本寒鴉

抜きん出る櫂一本寒夕焼

一時間一本一輛冬菜畑

多摩川の河原にぽつと雪だるま

春の夕野良猫に擦り寄られたり

ママママとパパは泣かるる小正月

夫と二人だけの元日となり、物足りなさもありましたが、お気に入りのお店のお節料理を誰に気兼ねすることもないままに三人前相当を思う存分心行くまでいただき、賀状もゆつたりと拝見できて静かに暮れました。

二日は、例年の甥家族五名と当方八名の新年会となりました。

血縁とは摩訶不思議なもので、子供達は年に一度の出合いを待っていましたとばかりに、直ぐに打解けて楽しそうに遊び出していました。

甥のお酒がすすむにつれ甥の自慢が次々に。嫁さんがさりげなく止めるのにもめげずに甥の話は続く。その甥夫婦の軽妙な会話に大人八名がお腹を抱えて笑い、途中で帰ると言っていた娘の連合会も最後まで笑い通して居ました。多少の不安もあつた新年会も賑やかに過すことが出来ておみくじの大吉でも引き当てた様な晴やかな気分を満たされました。



吉弘恭子

おろぬきを大事に食べて年明る

御降りの雪になれやとあふぐ空

壘地あり函館本線雪のなか

己がいろ惚れてしまひし冬さうび

夕焼のうしろにまはる冬の影

三十六峰風花ぐるりとまはり来ん

枯葉舞ふ鳥語日本語中国語



一周忌

赤座典子

音すべて静まりてをり初景色

ひっそりと百合根二片雑煮食む

あれこれと中七下五初電車

小正月旅友達の息災に

紫と碧衣声和す寒の寺

葬礼の日々冬晴れて友の徳

冬木の芽問ひに答を得しやうな

現在第七巻まで刊行されている「みをつくし料理帖」は、女性に大人気の時代小説である。

十八才の主人公が、人を幸せにする料理を作りたいと、懸命に生きる話が軸になっている。

作者の高田郁さんは、別の名前で十五年程前漫画原作者であった。

お父さんの愛読していた、山本周五郎の世界を書きたいと、時代小説作家に転じる。その経緯が書かれた「晴れときどき涙雨―高田郁のできるまで」にも、小説と同じ強さ優しさ切なさが溢れている。

近頃は勤が鈍くなったのか、なかなか会えてよかったと思う本にあたらない。でもこの作者を読んだ後はいつも幸せになれる。これからずっと応援団であり続けたい。

井上石動

寒晴や芽吹まちたる大櫛

沢水の流れ細かり山眠る

全天の星降る櫛の氷柱かな

ハイパント勝ちとる初老ラガーかな

はうれん草きらなす堰へ二摺み

練炭のにはふ炬燵か嬉しくなる

鳩どもと歩く冬日のホームかな

シャンソンを聴いてきました。

半年ぶりに、花の東京へ行った。

素人が集まって唄う「シャンソンの会」を聴くため。20人程で満杯の小屋。伴奏はプロのピアノ。そして嬉しく驚いた。「自分流のシャンソン」を、みなさんが慈しみ唄っている。プロのシャンソン歌手達より、その発音の良さ・その素朴さで越えている。はろばろ赴いて正解。

ついでに、30年前に住んでいた小田急線・東北沢へ「センチメンタル・ジャーニー」。

町は、昔のままあり、全く変わってしまつたあり。まさに『時は過ぎゆき私は残る』の感に涙す。

さあ、たつぷりと「過去」に浸つたので、これからは「今日」を生きねば…。

猫記念日

大日向幸江

二月二日猫記念日と乾杯す

犬ふぐり水道会社の鉄条網

寒菊の根元にこぼす米研水

初雪の根雪となりて橋の上

春よ来い胸より取り出す受験票

金柑を焦してしまふ訃報来し

枇杷の花道行く人の足を止め

道の向こうから私を呼んでいる。

「ちよっと、その人」。確かに呼んでいる。春浅い夕方、小さな猫が手招きしている。近寄ると猫が私に「今夜泊らせて」と言っている。電線には鴉と夕陽がぶら下っている。

抱き上げると上手に甘える。そして犬ふぐりのような瞳で私を見上げる。夕陽の中に私と小猫が鴉の好奇心を満足させていた。名を「テンコ」。年齢不詳の猫と私の記念日を二月二日としランチを赤ワイン・木天蓼・ミルクで乾杯する。

過去を話さぬ「テンコ」。七年もの間彼女が主で私がメイド。木天蓼みるくに酔った彼女を介抱する。そんな時、テンコはあの犬ふぐりのような瞳で遠くを、思い出の中を彷徨う。

花の少ない二月、テンコは窓辺に座り春を呼ぶ。

新 年

木村茂登子

髪洗ふ間のもどかしや除夜の鐘

初富士は日本晴を背負つて聳つ

海山の幸がよりそふ雑煮椀

チグハグになればなるほど福笑

松の内見すぎ世すぎはさておきて

成人式その年頃の匂ひ立つ

初島田十九が成人式のわが世代

成人式の年頃にある時ハツとするほど美しさが匂い立つよう思われる。

昔は十九才の春初島田を結つて女の子の成長を祝う風習があった。

長姉が初島田を結び晴着を纏つた姿を次姉も私も妹もあこがれの目で見っていた。しかし次姉の頃は日本髪を結ぶ世相ではなく、長姉の晴着は戦後日本舞踊を習つた次姉の発表会の衣装となり、又そのお下りを紫の無地に染め茶会の折の私の正装となつて思い出はつながつていった。

成人式が国民的祝日となつたことを私は喜ばしく思う。

今年は大雪になつたが、万葉集に
あらかしき年の始に豊の年
しるしとならし雪の降れるは

とあり、今年の新成人は初雪に前途を祝われての門出となつたと思う。

冬 銀 河

齊藤裕子

身支度の大工が囲む朝焚火

北風や自転車の稚児眉八の字

北風を物ともせず美脚の娘

セーターにお日様溜る談話室

夫と聞く手術説明春隣

目を閉じて夫が顔寄す梅の花

病院食バレンタインにチョコムース



中 冬 篠田純子

初笑ひ初泣きもあり大家族

やうやくに除染始まる風

去年今年籬のゆるまる音がする

壁に在る小面うごく淑気かな

ミシン目のひとつ飛びをる春隣

をさな児の握りこぶしに寒さかな

さざんかの一片銜へ鳥の発つ



冬 深 み

定梶じょう

神の御名讃へて聖夜酔ひしれる

石だたみ玉歩とは斯く初鴉

見て通りかへりも焚火見て通る

買かけて来たり返り見山眠る

地に到らん勢ひこの村の氷柱

煙突の愚直の高さ深雪晴

焼き加減レアにしてくれ冬深み

流れ行く大根の葉の早さかな

虚子

この句を、客観写生の到達し得る最高の句、と口を極めてほめる人がある。まっ青な葉が見えるようだ、と評する人もいる。

川に出て大根を洗う時、痛んだ葉は当然ちぎって捨てるわけだが、そんな葉は黄ばんでいて軽いため浮かんで流れることが多い。一方、まっ青な葉は当然ながら重いから浮んで流れることが少ない。その少ない例を虚子が写生したということだろうか。詩歌の語句では普遍、妥当性がないならただの嘘になってしまう。葉っぱの流れることに普遍性はあっても、それが大根とあれば妥当であるか否か。俳句の毀誉については今さら言うまでもないことだが、掲句、言葉を尽していつ程の句であろうか。

前月抄

群に遅るるいつもの一羽冬の暮 佐藤喜孝

縄文のかほ弥生のかほ焚火して 定梶じょう

大根引くひりりと走るひび深し 須賀敏子

新蕎麦やあかい湯桶の折鶴めく 竹内弘子

空がきれいと独りごちをり冬帽子 田中藤穂

安らかな今日であるらし冬の虹 長崎桂子

ふかぶかと変身願望冬帽子 早崎泰江

公園孤島驟雨愉しき杉楓 堀内一郎

石叩折しも鵜庭の池 森理和



冬空をあふれてきたる雨きれい	吉弘恭子
篝火の灰払ひつつ札収	赤座典子
搔卷の別珍やさし生家かな	井上石動
けやき黄葉空の青さを忘れぬし	大日向幸江
枯葉踏む枯葉が放つ陽の匂ひ	木村茂登子
ままちゃりでのこの坂越えん今日の春	斉藤裕子
小六月猫撫で声で猫を釣る	篠田純子芝
気遣ひのぬくもりこもる冬至粥	宮須磨子
薄墨のふっくら温き菩薩さま	長崎桂子

喜孝 抄



二月作品より

佐藤喜孝

縄文のかほ弥生のかほ焚火して

定梶じょう

焚火は人を惹きつけるなにかがある。冬に燧をとるための焚火が本来ではある。終戦後都会では焚火で燃やす物も貴重であった。近所の魚屋が魚の箱を毀して焚火をしてくれた。したがって焚火奉行は魚屋の子供であった。夏の夜、山野での焚火は楽しいもので夜遅くまで語らひが尽きない。焚火明りに照らされた顔、顔。近代文化の表層が見事に剥がれ素の顔が現れてゐる。焚火の魔力である。縄文顔と弥生顔は違う違ふのだらうか。

冬銀河外湯に沈む葉を拾ふ

須賀敏子

露天風呂での何気ない動作を書留め、冬の銀

河の感動をつなぎ止めた句である。裸で見る冬銀河は殊更であつたらう。私はこれぞ天の河といふものを見たといい記憶がない。焚火を囲みながら、または露天風呂に入りながら銀河を見たいものだ。

大根引くひりりと走るひび深し

須賀敏子

「ひりり」は辛みや傷口の痛みを表す時に使われる。大根を畑土から引抜く。大根にひびが入ってしまった。その罅のありさまを「ひりり」と詠んだ。普通「ひりり」は辛みや傷口の痛みを表す時に使はれる。がかうして詠んでみると髪の毛のやうに細い罅が見えてくる。このオノマトベの魅力に抗しがたく言葉だけで句会で頂いた。

新蕎麦やあかい湯桶の折鶴めく

竹内弘子

蕎麦屋の湯桶は四角い漆器がよく使はれる。角の一カ所に持ち手、もう一カ所に注ぎ口が付いてゐる特異な形。折鶴めくと言はれるとさうださうだと感心させられる。新蕎麦への賛辞を折鶴めくで見事に言ひ仰せてゐる。

木枯や中野坂上駅を出て

田中藤穂

鑑賞者としては落第であるが少しこの句についてすこし個人的になるが書いておきたい。「七座句会」は「獐」を盛上げやうと支部句会として七人で始めた。吉弘恭子さんの手造料理で一杯やりながらの句会である。木枯さんはビールを好まず、夏はひや酒、冬は爛酒を嗜まれた。寒林先生はお酒は苦手でコーヒーを魔法瓶に持参してゐた。大山夏子さんもお酒が嫌いではなかった。一杯やりながらの選句は佳句が多くな

り一段と楽しい。手術後の木枯さんは酒量がぐんと減ったがそれでも飲んで頂けた。堀内一郎さんも時間が出来るとたずねていただき真つ赤な顔で帰路についた。これは「水音」以来のならひである。帰りは丸ノ内線の中野坂上駅まで話ながらお送りした。酔った勢いで浮んだ句を口にするると即座に諾否の選定をされたりもした。中野坂上は高層ビルが出来てから冬のビル風が惱まされる。「ビル風」と造語したが広まる心配がない。掲句の「木枯」は季語であり、八田木枯さんのことでもある。「木枯」も懐かしむものになつてしまった。

冬空をあふれてきたる雨きれい

吉弘恭子

「きれい」といふ口語が新鮮な響きで伝はつてくる。いつまでも雨はさうありたい。冬に限定したのがよいかどうか迷ふところ。

心太死にゆく人の目がきれい

小川真理子

プール歩行裸眼に人のみなきれい

竹内 弘子

どくだみを挿してコップの水きれい 斧田 綾子

篝火の灰払ひつつ札収

赤座 典子

「篝火の灰払ひつつ」で臨場感の横溢した句になつてゐる。境内の暗に篝火の炎が生動してゐる。一年のしめくくりとしての札収。充実した年であつたやうだ。

海鳴りの参道長し札納め

柴田佐知子

搔卷の別珍やさし生家かな

井上 石動

搔卷きとは懐かしい。衿の別珍のやさしい肌触り。己の匂いの中に包まれて眠る搔卷きは生家へとつながるキーワードである。私も母の作った搔卷で寝てゐたころの隙間風の家を懐かしく思ひだした。

八田木枯さんの句で特に好きな句があり何と

か脇を付けたくなつた。表六句と名残の裏をを再録してみる。

かの懸り羽子も夜雨にしづくすや

木枯

蒲団の襟の別珍に顎

竹洗

空青く祝ひの席に招かれて

ゑつ

庭の砂子に松の影あり

不寝

立待月いつのまにやら池のうへ

竹洗

風爽やかに雲流れゆく

ゑつ

隠し田の穂穂の色抜けてゆく

竹洗

行く父を追ふ二人のこども

音々

手作りの菓子 of なんとか仕上がりて

ゑつ

重箱に入るれうり数々

不寝

見渡せば花や俳句の国を統べ

木枯

おのころ島に霞たなびく

音々

(あを二〇一〇年八月号)

けやき黄葉空の青さを忘れぬし

大日向幸江

けやき黄葉に限定せずとももみぢを仰ぐ時、
バックにある空の青さに驚く。「空の青さを忘れ
ぬし」は、その驚きの表現。当り前のことを「忘
れぬし」で掬ひあげてゐる。

ままぢやりでこの坂越えん今日の春 斉藤 裕子

今月の句は夫君の入院なされたことを詠まれ
てゐる。掲句はその不安を吹払ふかのやうだ。
「坂」はよく人生に例へられる。その俗さがこの
句では不思議に好もしく思へる。「ままぢやり」
が見事な働きをこの句ではしてゐるのである。

薄墨のふつくし温き菩薩さま

長崎 桂子

遠地からひとり「あを」に参加下さつてゐる長
崎桂子さんだが、作句意欲は旺盛、喜んでゐる。
特作も二〇〇七年五月号「九華公園」と題し、「花
びらを水面に浮べ水草生ふ」を。二〇一二年三
月号に「どんど」と題し、「暗闇にどんどの火の

粉鮫小紋」と佳作を発表してゐる。今回は「俳
画展」十一句を寄稿された。「温し」は春の季語。
正に春のやうなぬくさを感じる菩薩さまが薄墨
をたつぷり使つて描かれてゐた。絵画を言葉で
表現するのは難事である。掲句はこの難題を克
服してゐる。心に残つた俳画展だつたのだから
と想像できる。

俳画展一角多彩年賀状

長崎 桂子

俳画展の作品は墨色が主で淡彩が少し施され
てゐる位なのだらう。蟹歩きで一点一点楽しん
でゐたら色鮮やかなコーナーがあつた。新年を
言祝ぐ年賀状が飾られてゐる。俳画と対比して
多彩な年賀状に喜びを共にした作者である。



八田木枯回想
八田木枯回想

その八

—夕焼けて西の十萬億土透く 誓子

阿部寒林

(承前)

ふるさとの根のはびこりし花の雲
木枯

野遊びにことよせてゆく柩かな
葬列のよじれて曲る蝶の昼
死後のものか午後の干網白く透き
鳥死して翅を野分が動かせり

いま、橋本多佳子の文をなつかしむに—

多佳子恋ふその頃われも罌粟まみれ
あらくれて日月は逝く鴛鴦のそば

これらの木枯俳句に接した「天狼」所属の人たちは、うさみとしをが書いているように木枯は精神異常になったのではないかと、その変貌ぶりに非難の矢を向けた人が少なからず居たらしい。

この「晩紅」が出る少し前に俳人の群がることで有名な新宿「ボルガ」(高島茂経営)で木枯ともう一人誰かが同席していたと思うが最近の木枯俳句の変貌ぶりの理由を訊いたことがある。——理由はかんたん。類想類句を絶対に避ける方法としてはこれしかない。ということであつた。ぼくは木枯に言つた。

「個性尊重は賛成だが、余程の名作でないとは人は記憶してくれない、まして抽象的表現でその佳さを引き出すことは至難の業ではないか、作風を否定はしないが詩性の充実を忘れないで欲しい」いま思うと生意気なことがよく言えたものだと思う。そうかと言つて木枯の主張というか方法としての句作は後年僕にも襲つてきたのである。あれだけ厳選な「天狼」「遠星集」がやや寛選となりかけた頃、昭和五十年代、僕の入選句の類句が入選しそれも上位を占めているのに驚いた。少し推敲すれば更に更に佳くなった例ともとれる。自分の句が盗用されるのに偲びず投句は断念することにした。次号に選者誓子は「欄外に遠星からぬけることはよいが、俳句の骨格を忘れずに努力して欲しい」このような内容の一文を掲載しているが、これが僕への教訓であることは木枯以外誰も知らない筈である。木枯は「真似される位ならいいじゃないです

か―」と笑っていた。

うさみとしをと共同出版の「晩紅」の存在で木枯の句作欲は甦ってきたが生活は決して楽ではなかった筈だ。たった二人の同人誌をどうして維持出来るのかを訊いたことがある。「としをはそれなりの資力がある。ぼくは実は智恵子がリウマチの一級障害者なので相当毎月支払われる金額のお陰で「晩紅」を出す資金としている」との話であった。ということは病妻も共に協力して呉れたことになる。木枯俳句の確立にはかく様々な事情があつたのである。

それから既に述べたことであるが「晩紅」二十二号に掲載されている（対談）木枯私史の中で昭和二十一年十一月頃、となつているが、終戦の翌年に彼が上京しているわけがない。まして波郷宅をどうして知ることが出来るかである。彼が「遠星集」の巻頭を飾つたのが「天狼」創刊号の（昭和二十三年）六月号である。勿論、津からの投句である。

僕が二度目の波郷宅訪問の時に木枯を誘つたのであるから十三号台風以後八田フアミリーが東京へ移住した頃ということになる。木枯の記憶違いを訂正して置く。

（続）



2004/10/26
中野・明德稲荷 / 句会の後



2004/4/27

高田馬場にて

2009/1/13



獐回頭

高島茂 選評

追ひつきて持薬手渡す大試験

吉弘 恭子

中学か高校の試験であろうか。その試験の時期になると、親子共に苦勞が多い。徹夜で勉強がつづく。やっと成果が決まる試験の日が来た。試験のことで頭がいっぱいの少年は、いつも使っている持病の薬を忘れて出ていったのである。その少年を追って薬を持たせる母親。試験の成績を心配することはもちろんであるが、試験中に緊張のあまり持病でなやまされるのではないだろうか。その事も心配である。試験日は親子ともども大変な一日である。

(一九九四年三月)

史實の碑木曾三川の風涼し

長崎 桂子

木曾三川は、木曾・長良・揖斐川の合流する下流一帯である。この流域は低湿地で大洪水に見舞われる水害の多い所である。流域の農民たちにとってどうしても、治水工事を完成させなければならぬ。農民の嘆願によって幕府が重い腰をあげて工事を決意する。薩摩藩にその工事を請負いさせる。その命令を受けた薩摩藩こそ大変で資金、人材、資材はもとより、不備で工事中に洪水が多く、疫病の流行、病死者、割腹者を多く出して、五百万両ともいう膨大な出資で島津家は衰退する。

平田鞠負という家老は総奉行として工事に就いたが、工事の終わった翌日、あまりにも多くの犠牲を出した責任の重さのあまり、報告書を出して自刃して果てる。史実の碑はそれである。小説・映画・劇となって、その事は周知である。現在では長良川の河口堰のことで自然破壊の問題として、いまだに解決をみていない。木曾三川の風は涼しいが、問題は日増しに熱くなるばかりである。

(一九九四年六月)

花の下見返る顔のつべらぼう

内藤 悦子

オロツコ族が家の守り神としている木彫の人形には両目がくりぬかれて、それなりに鼻すじも通っているが、白木のこの人形の顔はのつべらぼうに見える。のつべらぼうは、れつきとした妖怪なのである。ぬつべらぼうと謂って古いお寺や墓地に出る。ぶよぶよとした肉のかたまりの感じで、手足のようなものがあるが、目鼻がない。妖怪談義には欠かすことの出来ない代物である。桜の花の下で振り返った顔がのつべらぼうのようだったというのである。満開の桜の花の白さのせいばかりでもなさそうである。のつべらぼうのように見えた人間が花見をしていたのである。

(一九九六年五月)

せぐれすわ郎一

ランドセル背よりはみだし桜咲く

三月二十一日靖国神社の桜が咲いた。暇でこぼしていたが我が業界も一斉に活気が出てきたようである。人は季節に左右され易く俳句も同じようだ。東一句会（国立国際医療研究センター内）以後、すっかり「萱」に足が重くなり残念でならない。十年前なら何が何でも出掛けたものだが、すっかりご無沙汰して仕舞った。それでも「風萱集」を見させて頂けるので大変勉強になる。私には試験であり毎月の試験問題に苦しんでいるが感謝の外はない。永田耕衣氏の二句勘弁など拾い読みして答えを出すこともあるが的外れは不勉強のせい、何とぞご勘弁のほど。

△二〇〇九・三・一二△

東京の雪ふるさとへ電話する

萱3月号、木村嘉男代表の編集後記の「去年からの極端な天候異変は少々不気味である。異常が異常でなくなるような気がする」は的中した。3月11日、東北関東大震災発生。最初は左程気に掛けなかったが、徐々に激しく我が家の食器類もいくつかお釈迦に、長押の額も落ちたり外れたり。町内でも被害者が出て近くの小学校へ避難させた。福島茅屋も壁が落ち、旧街道の旧家は倒壊、寺の墓は全て倒れているとか、親戚は無事だが福島原発のせいで皆家に籠っているようだ。今朝の新聞を見ると新宿でも西方へ避難先を考える人があるようだ。私の処は、お客の品物を沢山預っているので離れられない。早く治まって欲しい。

△二〇一一・三・一六△

吟行のご案内（神楽坂）

日時 四月六日（土） 十一時

集合場所 JR有楽町駅前「交通会館」1F三省堂前

昼食 「権八」（12時半〜） 中央区銀座1-2-3

電話 050-5815-4492

申込〆切 三月三十日 篠田純子まで





別冊 特別付録
『俳句ダイアリー 夏』

月刊 俳句界

2013年 5月号

定価 1000円(税込)

対談

魅惑の俳人
山口青邨 ★ニッポンシブ!

佐高信の甘口で「コニチハ」！
久田 恵（ノンフィクション作家）

私の一冊 河野薫 『セレーション結社』(満)

特別対談 角川春樹 VS 永田和弘（敬心）

角川春樹最新句集『夕鶴忌』刊行記念
辺見じゅんのこと、河野裕子のこと

◎鑑賞 柳田邦男 松崎鉄之介 大串章

◎新作10句とエッセイ

ピラニアクラブ 注目の句集 **村越化石『籠枕』**

◎鑑賞 檀太郎 嵐山光三郎 今泉康弘

◎『モガリ笛』秀句選

◎鑑賞 檀太郎 嵐山光三郎 今泉康弘

特集

俳句史に残る『名講演』

山口青邨、中村草田男など「俳句を変えた」俳句の未来を「決めた」俳句史に輝く名講演（一部抜粋）を掲載！

特別付録 俳句界NOW 井上康明

特別作品 池田昭雄 松村多美 小笠原和男

森島 檀一雄句集『モガリ笛』を読む

申請変更の可能性あります。

株式会社 文學の森

お求めは ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-7 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

あとがき

三月五日、堀内一郎さんが逝去なされた。八日・九日と盛大な葬儀であった。一郎氏の多方面にわたつての活躍の場の広さを改めて知った。遺族のご挨拶を聞き、一郎さんの完爾たる遺影も諾なるかなと納得した。その話の中にご逝去二日前米寿の祝ひをご家族でなされたさうだ。残念なことには違ひないが、充実した人生を全うされた。見事である。一郎さんとは、水音・暖流・獐・あをとお付き合いさせていただいた。計算したら五十四年にもなる。年月も長いが私生活でもお世話の掛けつづけであった。あを十周年記念句会・七座さよなら句会・傳での一郎ハーモニオ力の会と、ここ数年でも一郎さんと楽しい時を過した。

死者よりも生者は蒲柳春寒し

喜 孝

三月号は大分遅れてしまった。申訳なくおもつてゐる。おゆるしを。

先日、おばあちゃんとおじいちゃんが言争つて大き

な声を出してゐたら三歳の子が私の顔を両手で押へて自分の顔に向け、「おばあちゃんの言うことをよく聞くんですよ」と優しく諭された。争つてゐるのが嫌だったのだらう。孫の前だけでもいいおじいちゃん・おばあちゃんでないければと反省した。三歳と云へば記憶に残り始める頃、大きくなって何を覚えてゐるのか尋ねるのを楽しみにしてゐる。(喜孝)

二〇一三年三月号

発行日	三月十九日
発行所	東京都中野区中央2・50・3
電話	090・9828・4244
ファックス	03・3371・4623

印刷・製本・レイアウト

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

竹僊房

郵便振替

00130・6・55526 (あを発行所)

会費 一〇〇〇〇円 (送料共) / 一年

乱丁・落丁お取替えます。

